

# 泊園書院デジタルデータベースとその応用

吾妻重二

## Digital Database of Hakuen Private Academy and its Applicability

AZUMA Juji

Hakuen Private Academy is one of the most famous Classical Chinese Studies school in Osaka, Japan. Over the past ten years, I have been conducting research on the materials related to this school under various grants, and have accumulated digital databases.

In this final year of the KU-ORCAS project, I would like to summarize and introduce what we have accumulated so far as the Hakuen Private Academy digital database in this paper. During after more than ten years of work, I believe that we have almost finished compiling data on the important materials of Hakuen Private Academy. Related sites are “Kansai University Digital Archive” (<https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/>) of KU-ORCAS and “WEB Hakuen Shoin” (<https://www.kansai-u.ac.jp/hakuen/>).

In addition, I would like to introduce some examples of research making use of these databases for reference and to point out problems, which will lead to further development of research in the future.

キーワード：泊園文庫、関西大学デジタルアーカイブ、WEB 泊園、IIF、藤澤南岳

### はじめに

泊園書院関連資料に関して、筆者はこの十年余りの間さまざまな助成のもとで研究を行ない、またデジタルデータベースを蓄積してきた。

すなわち ICIS（文化交渉学教育研究拠点、2007 年度～2011 年度）、CSAC II（アジア文化研究センター、2011 年度～2015 年度）、関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究、2014 年度および 2015 年度～2016 年度）、筆者を研究代表者とする科研「泊園書院を中心とする日本漢学の研究とアーカイブ構築」（基盤研究（B）（一般）、2018 年度～2021 年度）、そして本 KU-ORCAS（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、2017 年度～2021 年度）による助成などがそれであり、さらに本学の東西学術研究所からも研究活動のサポートを受け

てきた。そのような支援のもとで、諸研究のほかデータ入力などを外部業者委託、PD・RAの協力、アルバイト雇用、さらには筆者本人の作業などにより進めてきたのである。

このKU-ORCASにおける筆者のミッションは、第2ユニットとして掲げた「東アジアの中の大阪の学統とネットワーク」であり、特に泊園書院研究を中心として、それまでの調査研究をいっそう発展させるべく取り組んできたところである。

そこで本プロジェクトの最終年度に当たって、まずこれまで蓄積してきた泊園書院デジタルデータベースにどのようなものがあるのかを総括したい。多くの作業を経て、泊園書院の重要資料については相当程度データ化できたと思われるからであって、その一部はすでにKU-ORCAS「関西大学デジタルアーカイブ」<sup>1)</sup>サイトの「泊園文庫デジタルアーカイブ」と「泊園印章デジタルアーカイブ」、および泊園書院の「WEB 泊園」<sup>2)</sup>サイトにおいて公開しているところである。

さらに、これらのデータベースを使った研究の事例をいくらか紹介して参考に供するとともに問題点を指摘し、今後の研究の展開に繋げたいと思う。

## 1. 泊園書院デジタルデータベースの概要

これまでに作成した泊園書院関係デジタルデータベースはさまざまな分野にわたる。ひとまずⅠ著作・日記・書簡、Ⅱ門人録・名簿、Ⅲ画像、Ⅳその他の4つに分けて紹介しておくことにする。<sup>3)</sup>

### 1.1 著作・日記・書簡

#### ■泊園院主の著作

##### 【東咳の著作】

『東咳先生文集』（LH2\*4.02\*193-1~8）句読点あり 10巻8冊 W

『東咳先生詩存』（921.1\*F1\*1）1冊 T

1) KU-ORCAS 関西大学デジタルアーカイブ <https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/>  
 泊園文庫デジタルアーカイブ [https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/hakuen\\_bunko/about](https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/hakuen_bunko/about)  
 泊園印章デジタルアーカイブ [https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/hakuen\\_yinpu/about](https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/hakuen_yinpu/about)

2) WEB 泊園 <https://www.kansai-u.ac.jp/hakuen/>

3) 以下、凡例的なことを示しておく。

1. Wはワードファイル、Eはエクセルファイル、Tはテキストファイルを示す。
2. 図書番号のLH2は泊園文庫、LO2は大阪文芸資料、L24は中村幸彦文庫、001\*Jは東西学術研究所の所蔵、それ以外はみな本学総合図書館所蔵の一般書である。ただし、ここに示すのはデータ化した底本の番号であって、その図書が他に架蔵されている場合もあるので注意されたい。たとえば『東咳先生文集』はここでは泊園文庫蔵本を用いたが、総合図書館の一般書としても架蔵されている。
3. 外部図書館等に所蔵される場合は、その所蔵先を記した。
4. データが拙著『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』、『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（甲部）』など既出版物に掲載されている場合もある。これらの書誌は後文で示してある。

**【南岳の著作】**

- 『七香斎文雋』（919.6\*F1\*1） 1冊 T  
『七香斎詩抄』（919.6\*F1\*2） 1冊 T  
『七輯』（L24\*\*21-696\*1～3）句読点あり 3冊 W  
『藤澤先生講談叢録』（121.89\*F1\*1）和文 1冊 T  
『弘道新説』（150.21\*F2\*1）和文 25冊 T  
『教育博議』（LO2\*051\*K68）和文 全8号 T  
『論語彙纂』（123.83\*F2\*1～3）5巻3冊 T  
『飛鴻遺影』（001\*J-N\*103）1冊 T  
『醉世九劑』（001\*J-N\*94）1冊 W  
『万国通議』（N\*125.8\*F2\*1）1冊 T  
『泊園塾則』（大阪大学附属図書館石濱文庫蔵、『泊園書院歴史資料集』に翻刻収載） W  
『七香斎文叢』（LH2\*甲\*21）目次のみ入力 1冊 W  
『七香斎文叢』一～三（LH2\*甲\*22）目次のみ入力 3冊 W  
『南岳撰文墓碣銘』（LH2\*甲\*25）目次のみ入力 1冊 W  
『七香斎文稿』乾・坤（LH2\*甲\*122\*1～2）目次のみ入力 2冊 W  
『七香斎文稿』一～八（LH2\*甲\*125\*1～8）目次のみ入力 8冊 W

**【黄坡の著作】**

- 『論語彙纂通解』（国会図書館蔵、和文）1冊 T

これらの著作は南岳の『七香斎文叢』から『七香斎文稿』までの5点を除けばすべて刊本で、「和文」と記したものの以外はみな漢文で書かれている。いずれも藤澤東暎（1794-1864）、南岳（1842-1920）、黄鵠（1874-1924）、黄坡（1876-1948）の「三世四代」にわたる泊園院主による重要著作であって、特に『東暎先生文集』、『七香斎文雋』、『七輯』、『藤澤先生講談叢録』、『弘道新説』、『教育博議』、『論語彙纂』、『論語彙纂通解』は分量が多いこともあり、泊園書院の学問や思想、人脈などを知るきわめて貴重な資料である。これら院主の著作の内容に関しては拙著『泊園書院歴史資料集』第十章で解説しておいたので、ついて見られたい。

これらの文字データの多くはまだテキストファイルの段階だが（いわゆるベタ打ち）、『東暎先生文集』や『七輯』など一部の著作には句読点を施して読みやすくしてある。「句読点あり」と記したのはそのことである。

また『七香斎文叢』以下の5点は南岳の自筆稿本（甲部、A類）で、分量が多いこともあって、ひとまず目次（文章の題目）のみを入力してある。

**■日記**

**【東暎日記】** 句読点あり

- 『東暎日記』（LH2\*甲\*16、『泊園書院歴史資料集』に翻刻収載）1冊 W

【南岳日記】 句読点あり

- 『七香斎日録』(LH21\*甲\*146) 1冊 W  
『不苟書室日録』甲部(LH2\*甲\*206\*1~10) 全10冊 W  
『不苟書室日録』乙部(LH2\*甲\*207\*1~3 207\*5~8) 全7冊 W  
『七香斎日録』丙・丁・戊(LH2\*甲\*208\*3~5) 全3冊 W  
『七香斎日録』(LH2\*甲\*209) 1冊 W  
『七香斎日録』戊(LH2\*甲\*210\*1~5) 全5冊 W  
『七香斎日録』己(LH2\*甲\*211\*1~10) 全10冊 W  
『七香斎日録』庚・辛(LH2\*甲\*218\*1~18) 全18冊 W  
『七香斎日録』(LH2\*甲\*212\*1) 句読点なし 1冊 W  
『七香斎日録』乙部 附 年中行事稿本(LH2\*甲\*213\*1) 句読点なし 1冊 W

【黄鵠日記】

- 『三山二水録』(LH2\*甲\*163 句読点なし) 1冊 W

これらはすべて漢文で記された自筆の日記であり、泊園文庫の自筆稿本として収められている。特に南岳の日記は、明治8年(1875)34歳の時から大正9年(1920)79歳で死去する直前まで、途中いくらか中断を挟みながら約45年にわたって書き継がれて膨大な量に達しており、明治・大正期の泊園書院や漢学、大阪文化を知る第一級の資料である。丁寧な行書で浄書されているのは推敲を加えて記録を整理したことを示しており、単なるメモにとどまらない重要な資料的価値を持っている。

これらの日記はほとんどの場合、句読点のない、いわゆる白文で書かれているため、ワードに翻刻したあと句読点を施す作業を進め、南岳日記でいえば、そのほぼ9割方は作業がひとまず完了した。「句読点あり」と記したのはそのためである。ただし、日記には異体字や俗字も多く使われており、句読をどこに打つかもなお検討を要するところである。

つまり、これらをデータベースとして使えるようにするためには漢字・漢文が正しく理解でき、泊園書院の歴史を知る専門家の校閲と訂正が必要なわけで、整理にはまだ時間がかかりそうである。だが、これらの作業が終了して公開されたあかつきには、必ずや南岳研究、泊園研究のための重要なツールになることであろう。

ほかに黄鵠と黄坡の漢文による日記もいくつか残されているが、一部を除いてまだ翻刻は行っていない。

なお、これらの日記がいつの時期のものかについては拙論「泊園文庫の整理——印章と日記について」(『アジア文化研究センター ディスカッション・ペーパー』vol.10, 2015年)を、日記の書誌情報については拙著『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿(甲部)』(後述)を参照されたい。

## ■書簡

### 【泊園文庫自筆稿本内の未整理分（D類）】

no. 133-167, 168-250, 251-310, 313-412, 413-512, 514-613, 616-739（1～15）

計 616 通 W

泊園文庫には南岳や黄坡、黄鶴に宛てたものを中心に 616 通の書簡が残されている。みなくずし字で書かれているため、これを翻刻しデータ化した。書簡は個人情報を含むためまだ公開はしていないが、これまた院主を中心とする泊園書院の動向を知るための貴重な資料である。

## 1.2 門人録・名簿

### ■門人録

『菁莪録』（N8\*919.6\*13、『泊園書院歴史資料集』に影印収載） 1 冊 T

『泊園塾社中姓名録』（九州大学附属図書館吉村文庫蔵、『泊園書院歴史資料集』に翻刻収載） 1 冊 W

『泊園書生姓名録』（LH2\*丙\*109、『泊園書院歴史資料集』に翻刻収載） 1 冊 W

『登門録』（LH2\*丙\*122 1冊）、「登門録補遺」（LH2\*1.07\*\*61『孟子記聞』に挟む 1枚）、『泊園同窓会名簿』（001\*J\*33 1冊） E

\*この3点はエクセル「泊園門人データベース」のシートに入力済

『登門録』（LH2\*丙\*123） 黄坡筆 1 冊 E

『登門録原稿』（LH2\*丙\*108\*1～5）全 5 冊 E ところどころ入門年を記す

「登門録原稿にのみ記載された門人リスト」（横山俊一郎氏作成） E

泊園書院の門人は東暎の開塾後、120 年余の間に累計で一万人を超えたと思われる。私塾は今の学校と違って決まった学制がなく、入塾、退塾とも随時だったから正確な門人数はもちろんわからないが、それでも近世・近代の私塾としては多くの門人録が残っている方である。この中には『菁莪録』や『登門録原稿』のように門人の入塾年を記すものも含まれていて、はなはだ貴重である。

これらの門人録・名簿は多くが泊園文庫自筆稿本（丙部、C類）に収められる。書誌に関しては拙著『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（丙部）』（後述）を参照されたい。<sup>4)</sup>

### ■成績表・出席表

『生員勤惰表』（LH2\*丙\*101\*1～8）全 8 冊 E

『通学生勤惰表』（LH2\*丙\*104\*2～5,7）全 5 冊 E

『講筵出席簿』（LH2\*丙\*110） 1 冊 E

『応門簿』（LH2\*丙\*111\*1～4）全 4 冊 E

4) 『登門録』、「登門録補遺」、『泊園同窓会名簿』、『登門録原稿』のエクセル入力には本学東西研非常勤研究員の横山俊一郎氏（現：KU-ORCAS の PD）による。このあとの成績表・出席表以下の名簿の入力も同氏の尽力による。

### ■月謝領収簿

『束修領収録』(LH2\*丙\*91) 1冊 E

『通学生月謝領収簿』(LH2\*丙\*92) 1冊 E

『月謝領収簿』(LH2\*丙\*93) 1冊 E

### ■その他の名簿

『第貳拾貳回泊園同窓會常費寄贈録』(LH2\*丙\*113) 1冊 E

『贈叙位祝賀会 出席門生氏名録 出席会員氏名録』(LH2\*丙\*114) 1冊 E

『祝賀会発起人人名簿』(LH2\*丙\*117) 1冊 E

『泊園門人叙勲者名簿』(横山俊一郎氏作成) W, E

さらに上記のような名簿や出席表も文字データ化した。このうち特に注意されるのが『生員勤惰表』で、明治10年(1877)5月から明治33年(1900)10月まで、毎月の成績表が南岳の自筆により丁寧に記録されている。書院では毎月試験を行ない、その成績によって等級を分けており、塾生の学習記録としてきわめて貴重なものとなっている。これらの記録の内容に関しては、『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿(丙部)』を参照されたい。

また最後の『泊園門人叙勲者名簿』は横山氏が総理府賞勲局編集の2つの「褒章名鑑」にもとづいて作成した特色ある名簿で、横山氏の論文「近代の泊園書院と社会企業家—褒章名鑑にみる書院関係者の諸活動—」(『泊園』第58号、2019年)に詳しい紹介がある。

これら門人に関する記録は、はじめに挙げた『菁莪録』や『泊園書生姓名名録』など、幕末の東暎時代のものを含め、主要なものはほぼ網羅的にデータ化されたといえよう。

さらに、泊園の門人の伝記については次の書籍が今年(2022)春には刊行される予定である。

横山俊一郎著、吾妻重二監修『泊園書院の人びと—その七百二人』(清文堂出版より刊行予定) W

本書は横山氏が執筆し、筆者が確認、訂正を加えたもので、泊園門人の画期的な略伝集である。横山氏の調査によってこれまで知られていなかった門人が数多く見出されたわけで、泊園研究に対する貢献の大きさは測り知れないであろう。ただ、本書のもとになったワードの略伝データ(702名)と肖像の画像データ(364名)は著者の横山氏と監修者である筆者の手元にあるが、出版物として刊行されるため、その公開はしばらく後になりそうである。<sup>5)</sup>

## 1.3 画像

### ■泊園文庫の図書

以上は文字データについて述べたものだが、画像についても多くを蓄積している。これまで述べたⅠ著作・日記・書簡、Ⅱ門人録・名簿も、もちろんすべて画像化されている。

5) なお、この略伝の一部は『泊園』第59号(2020年)および第60号(2021年)に横山俊一郎「泊園の門人たち」(一)(二)として連載されている。また昨年(2020年)の「南岳百年祭」の際には『泊園書院の人々—その百五十人』と題して、150名の肖像つき略伝を製本、配布した。

### 【自筆稿本】

泊園文庫の自筆稿本類はすべて撮影済である。すなわち甲部（A類）224点、丙部（C類）129点、さらに上述した書簡類などの資料（D類）744点である。このうち甲部と丙部の詳細な目録が次である。

吾妻重二『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（甲部）』（関西大学アジア文化研究センター、2012年）

吾妻重二『関西大学泊園文庫 自筆稿本目録稿（丙部）』（関西大学アジア文化研究センター、2013年）

これらの目録のPDFは上記「WEB 泊園」サイトでも公開しているので参照されたい。

### 【院主および石濱の著作など】

東暎、南岳、黄鵠、黄坡の4人の院主および石濱純太郎（1888-1968）の著作で本学に所蔵されるもの（総合図書館の一般書と泊園文庫、東西学術研究所）は、ほぼすべて撮影が終了した。その中には自著はもちろんのこと、他書への書入れ本も含まれる。ほかに泊園文庫所蔵の貴重書や、泊園門人・友人らの著作も多く撮影した。

以上の撮影済画像については、KU-ORCAS「泊園文庫デジタルアーカイブ」でIIIF形式により順次公開しているところである。

### ■印章

泊園文庫には多くの印章が含まれており、現在、関西大学博物館が管理している。ほとんどは南岳の所持品で全172顆あり、すでに、

吾妻重二『泊園書院印譜集——泊園書院資料集成2』（関西大学東西学術研究所資料集刊29-2、関西大学出版部、2013年）

において画像と解説を載せている。この印譜集はKU-ORCAS「泊園印章デジタルアーカイブ」でも高画質のIIIF形式によりすでに公開している。

印章に関しては近年、藤澤家から新たに寄贈されたものもあり、それらについては拙論で報告したことがある。<sup>6)</sup> このほか、東暎と藤澤桓夫の印章6顆、岩倉具視家の雅印24顆も藤澤家から寄贈されており、いずれ紹介する機会があるであろう。

### ■石濱純太郎日記

石濱純太郎の日記は次の6冊が残っており、昨年（2020）年、石濱の令孫、石濱紅子氏から泊園記念会に寄贈された。

大正二年當用日記（1913）

大正九年當用日記（1920）

大正十一年當用日記（1922）

---

6) 吾妻重二「泊園文庫の新出印章と藤澤黄坡の印章について」（『東アジア文化交渉研究』第8号、2015年）。この拙論では印影のみ伝わって所在不明な黄坡の印章21顆についても述べたが、その後藤澤家でそれが見つかり、他の印章1顆と合わせた合計22顆が今年9月、泊園記念会に寄贈された。



大正十二年當用日記（1923）

大正十五年當用日記（1926）

大正十六年當用日記（1927）

石濱は中学校の頃から日記を書き起こし、死去の3年ほど前まで綴っていたと伝えられるので60冊ほど日記があったと推測されるのだが、現在残っているのはこれだけである。<sup>7)</sup> 万年筆で日々の出来事が几帳面に記されており、石濱の学問や泊園書院の動向を知る重要資料である。

#### ■碑文

大阪府下を中心に西日本には南岳ら泊園院主の撰になる碑文がきわめて多く存在する。ほとんどは漢文で書かれ、泊園書院の影響力の広がりをもまざまざと示している。それらを初めて調査したのが次の報告書である。

『泊園書院関係碑文調査報告書』（泊園記念会、2012年）W

この報告書は、平成23年度（2021）、藪田貫泊園記念会会長（当時）が関西大学特別研究・教育促進費の助成を得て行なった成果であり、南坊城光興、西田隆司、橋本康男、小林和彦ら諸氏の調査協力のもとで碑文205点が調査されている。碑の所在、サイズ、写真とともに碑文の翻刻も載せており、貴重で有用なデータとなっている。

これら碑文の一部はすでに「WEB 泊園」サイトにアップしており、また松井真希子氏による訳注が「泊園書院関係碑文 訳注稿」として『泊園』第58号（2019年）以降に少しずつ連載されている。また南坊城氏が引き続き熱心に各地を調査し、筆者のもとに画像と翻刻を寄せてくださっており、現在までさらに40数点が加えられている。

#### ■書画・写真・地図

このほか軸物などの書画、泊園書院周辺の地図、泊園書院関連の写真画像もかなり蓄積されており、「WEB 泊園」サイトや拙著のパンフレット『泊園書院 なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流』<sup>8)</sup>でも一部公開しているところである。

展観目録としては筆者が編集した次の3つがあり、多くの書画の画像と解説を載せている。

『藤澤東咳・南岳・黄鵠・黄坡と石濱純太郎の学統』（泊園記念会創立50周年特別記念展示 展観目録、関西大学東西学術研究所、2010年）W

『石濱純太郎没後50年記念 石濱純太郎とその学問・人脈』展観目録（関西大学東西学術研究所・泊園記念会、2018年）W

『藤澤南岳没後百年記念「南岳百年祭」「藤澤南岳の書と芸術」展観目録』（西大学東西学術研究所・泊園記念会、2020年）W

7) 大原良通「石濱純太郎の日記と学問」（吾妻重二編著『東西学術研究と文化交渉——石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』所収、関西大学出版部、2019年）、吾妻重二「石濱純太郎の修業時代」（同）参照。

8) 吾妻重二『泊園書院 なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流』（泊園記念会、2016年）。本パンフレットはいくらか補訂を加え、2017年に第二刷を、2020年に第三刷を刊行した。



地図に関しては、数多い大阪の地図の中で泊園書院の位置を示すものとして次の4点がある。

『大阪市街精密地図（船場之部）』（徳山昇三著、大阪：河内屋、明治39年〔1906〕、LO2\*T\*49\*1）<sup>9)</sup>

淡路町1丁目に「藤沢私塾」と記す。

『日本近代都市変遷地図集成—大阪・京都・神戸・奈良—』（地図資料編纂会編集、柏書房、1987年、R\*291.6038\*N1\*1）

大正7年（1918）製の地図を載せる。竹屋町9番地に「泊園書院文」と記す。

『大阪市パノラマ地図』（美濃部政治郎作成、大阪：日下伊兵衛・日下わらじ屋、大正13年〔1924〕）<sup>10)</sup>

建物を立体的に描いた珍しい3D地図。泊園書院とは記されていないが、竹屋町の南区役所すぐ北、㊦印のついたL字型の建物が泊園書院らしい。

『グレート大阪市全図』（大阪：八尾商会 昭和3年〔1928〕、H\*291.631\*O3\*1）

説明文に「泊園書院 竹屋町」とあり、竹屋町の「文」印が泊園書院と思われる。

#### 1.4 その他

その他のデータとしては次のものが筆者の手元にある。

『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』（吾妻重二編著、関西大学東西学術研究所資料集刊29-1、関西大学出版部、2010年） W

「新聞『泊園』」記事名・執筆者一覧、人名索引（吾妻重二編著『新聞「泊園」 附 記事名・執筆者一覧 人名索引—泊園書院資料集成3』所載、関西大学東西学術研究所資料集刊29-3、関西大学出版部、2017年） W

「泊園書院論説一覧」（泊園書院に関する文献目録）

はじめの2点はこれまでに筆者が刊行した書籍の原稿のワードデータで、いずれ機会を見てWEB上で公開していきたいと考えている。「泊園書院論説一覧」は「WEB泊園」サイトにアップしているもので、2009年以前と2010年以降に分けて泊園書院に関する図書や論説、新聞記事のビブリオグラフィを載せており、ネット上でのみ見られる。

## 2. デジタルデータベースの応用例

さて、これらの文字・画像データが泊園研究の遂行に当たって大きな力を発揮することは

---

9) この地図は国際日本文化研究センターの「所蔵地図データベース」でも公開されており、拡大して見ることができる（[https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map\\_detail.php?id=002152346](https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=002152346)）。

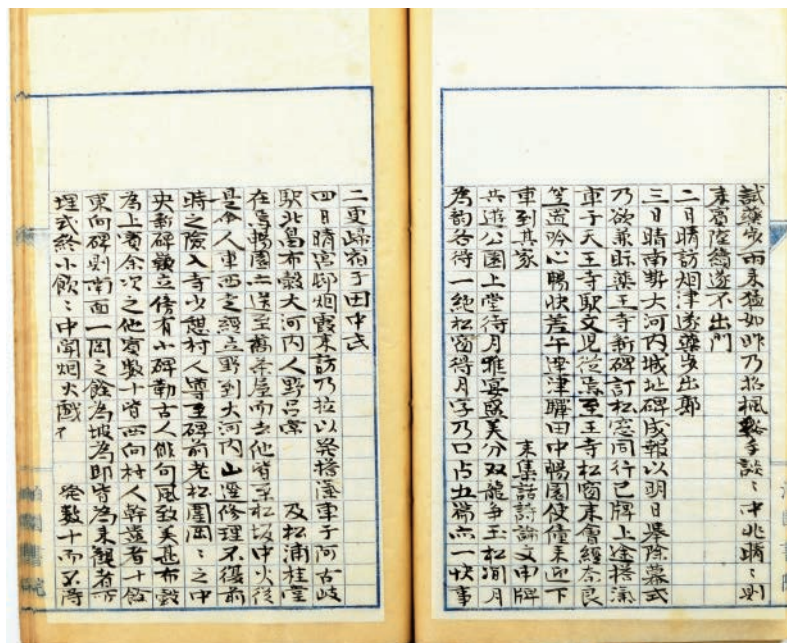
10) この地図は前注の「所蔵地図データベース」で公開されており、拡大して見ることができる（[https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map\\_detail.php?id=003023231](https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=003023231)）。このあとの「グレート大阪市全図」とともに人間健康学部、浦和男准教授の教示による。

いうまでもない。特に文字データの場合、固有名詞や専門用語などキーワードを検索すれば必要な情報がすぐに探し出せるというメリットがある。以下、その応用例を少し示してみたい。

## 2.1 松阪市「大河内城址碑」をめぐって

三重県松阪市大河内町の山間に、中世後期に南勢の地を支配した伊勢国司北畠氏を顕彰する南岳撰文、越智宣哲書丹の「大河内城址碑」(漢文)がある。一昨年(2019)のこと、松阪市の文化課から泊園文庫に関連記録はないかとの問い合わせがあったのだが、寄せられた情報はきわめて限られていた。

ひとまず南岳の文集『七香斎文雋』や自筆稿本『南岳撰文墓碣銘』を調べたのだが当碑文は収録されていない。しかし南岳日記データを検索すると、ちょうど大正3年(1914)10月3日に関連記事を見出すことができた。その写真(画像1)と翻刻文字データは次のとおりである。



画像1 大正3年(1914)10月3日および4日の南岳日記 (LH2\*甲\*218\*10)

### 【日記文字データ】

三日、晴。南勢大河内城址碑成、報以明日舉除幕式、乃欲兼眺藥王寺新碑、訂松窓同行、已牌上途搭瀛車于天王寺駅、文兒從焉、至王寺、松窓來會、經奈良笠置、吟心暢快、差午達津驛、田中暢園使僮來迎、下

車到其家、□□□□□□□□來集、話詩論文、申牌  
共遊公園、上堂待月、雅宴盛美、分双龍爭玉松間月  
為韵、各得一絶。松窓得月字、乃口占五篇亦一快事、

二更歸宿于田中氏。

四日晴、宮邨烟霞來訪、乃拉以發、搭瀛車于阿古岐  
駅。北畠布穀、大河内人、野呂常□□□及松浦桂堂  
在焉、暢園亦送至高茶屋而去、他皆至松坂中火從  
是命人車西走、經立野到大河内、山逕修理、不復前  
時之險。入寺少憩、村人導至碑前、老松圍岡、岡之中  
央新碑巖立、傍有小碑、勒古人俳句、風致美甚。布穀  
為上賓、余次之、他賓數十、皆西向、村人幹蠱者十餘  
東向。碑則南面、一岡之餘為坡為邱、皆為來觀者所  
埋。式終、小飲、飲中聞烟火戲□□□發數十、而不得

之、又有撒餅之祝、紛擾殊甚、似可厭、似可避、而亦可  
憐。薄暮与松窗桂堂辭去、飛車投宿于松坂旅舍。此  
夕中秋、月色可愛觀。松桂与文兒遊公園賞月也、而  
痴雲漸奪清光、余以疲在舍独卧、二更衆歸。  
(以下、略)

これを見ると、「大河内城址碑」が完成したとの知らせを受けた南岳は同年10月3日、門人の岡田松窓らと天王寺から汽車で三重県津市に行き、公園で月を鑑賞しつつ宴席を設けた。そして明るく4日、立野を経て大河内に到着した。山道が修理されていたので、以前来た時よりも険しくはなかったという。続いて碑の除幕式が行なわれた。除幕式は現地の北畠布穀が中心になって挙行されたこと、大勢の参列者があったこと、烟火（昼花火）があがり、餅が撒かれたことなどの様子が伝えられている。

さらに続く日記によれば、翌日の5日には太廟すなわち伊勢神宮を参拝、そのあと奈良を経て9日に帰阪している。奈良では書丹者の越智宣哲に会っているので、本碑の建立について話しあったことであろう。

このように、わずかな情報から日記の記事にたどり着き、建碑の際の詳細な情報が初めて知られたのである。<sup>11)</sup> また南坊城光興氏が本碑文を調査し、写真と翻刻を新たに送っていただい

11) この「大河内城址碑」は『松阪市史 第六巻』（史料篇・文化財、勁草書房、1979年）に写真と翻刻を載せている。

たのでそれも掲載しておく（画像2）。



画像2 大河内城址碑（南坊城光興氏撮影 2021年3月9日）

この件については後日談がある。南岳の「大河内城址碑」草稿が『七香斎文稿』乾にあることがわかったのである。<sup>12)</sup> 次頁の画像3のとおりである。このほか、書丹者の越智宣哲自身が当碑文を浄書しており、『藤澤南岳夫子文抄』に収録されていることも見出されたので、ついでに掲げておく（画像4）。

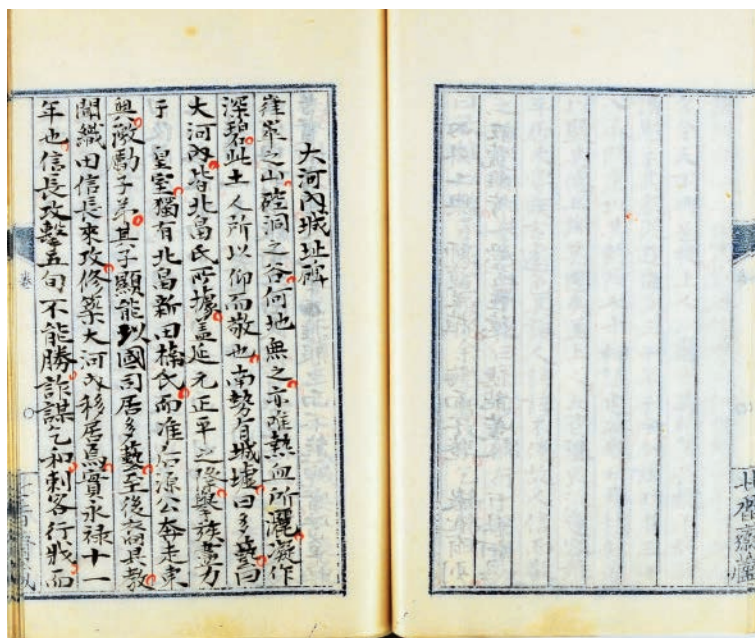
これによって当碑の草稿と碑文を対照させて見るのが可能になったわけで、きわめて興味深い。碑文には「二月朔」すなわち大正3年2月1日に撰文されたと刻されるが、越智の浄書には「大正三年一月」とあるので、同年の初めには草せられていたこともわかる。

なお、南岳が観月の宴を催した公園とは津市の偕楽園のことで、それについては南岳に「偕楽園雅集詩序」（『七香斎文稿』五、LH2\*甲\*125\*5）があり、詳しい状況が知られることも申し添えておく。

南岳の自筆稿本は膨大な量に達するため、画像があっても当該記事を探すのは容易ではなく、ここまでたどり着くにはかなり時間がかかってしまった。しかし現在は、上述したように『七香斎文稿』や『七香斎文叢』、『南岳撰文墓碣銘』などの散文稿についても、目次のみではあるが、すでに文字データ入力を済ませてあるので検索はかなり容易であり、以前ほど手間がかからなくなったといえる。

12) 井上孝榮「藤澤南岳と矢戸錦山」（吾妻重二編著『「南岳百年祭」記念論文集』、関西大学出版部、2021年）の指摘による。井上氏は「泊園文庫デジタルアーカイブ」で探されたものと思われる。なお、井上氏はあとにいう偕楽園の宴についても言及している。





画像3 南岳「大河内城址碑」草稿・前半（『七香齋文稿』乾、LH2\*甲\*122\*1）



画像4 越智宣哲浄書「大河内城址碑」前半（『藤澤南岳夫子文抄』、LH2\*甲\*156）

## 2.2 宮武正策をめぐる

四国高松藩主付きの奥医師（侍医）だった人物に宮武正策（1832-1898）がいる。昨年（2020）、その遺族に会う機会があり、所蔵する南岳らの書軸3点を示されて調査を依頼された。しかし、そこに記された情報としては南岳、宮武正策のほか、棕園という人名、有心庵という茶室名ぐらいしかわからず、はたしてどこまで調べがつくかどうか心もとない次第であった。

ところが南岳日記データを検索してみると、詳細な状況が明らかになった。すなわち、明治28年（1895）10月末から11月4日まで郷里高松に出向いた南岳が宮武に会っているのである。詳細についてはすでに拙論で述べたのでそちらを参照されたいが、<sup>13)</sup> 日記によれば、11月1日宮武を訪ねて灸治療をしてもらった南岳は、翌々日の11月3日、友人とともに宮武の自宅での茶会に招かれている。宮武は有名な茶人でもあったのである。この時同行した人物は赤松棕園、松籟君こと松平頼よりつぐ、菊池武熙、三木利平太といった面々であった。

これらの人物につきさらに『高松市史』などの資料で調べると、赤松棕園は高松市初代市長、松平頼よりつぐは高松藩主松平家の一門で反の政務総裁から香川県教育会長に就任した人物、菊池武熙は初代高松市議会議長、三木利平太は当地の豪商であることがわかった。つまり当時の高松の名士たちが宮武のところ集まった茶会であり、その席で書かれたのがこれらの書軸なのであった。

また、この人々は松平頼該（左近の号で知られる）、片山冲堂、黒木欽堂、牧野藻洲（謙次郎）といった高松の著名な政治家、学者ともつながりを持っており、南岳の人脈と宮武の人脈が重なりあっていることも知られた。日記の詳細な記述により茶室「有心庵」がどのような雅致な作りだったのかも推測できた。書軸に記された南岳の五言絶句もこれまで知られていなかった詩である。

このように、書軸のわずかな情報から南岳らのネットワークの広がりや交友の様子が続けざまに知られ、泊園書院の歴史に新たな史実をつけ加えることができたのである。宮武氏ご遺族にもたいへん喜ばれたが、筆者としてもまさに目の覚める思いであった。

南岳日記データベースがなければ、おそらくこのような成果はすぐには生まれず、そのまま埋もれてしまっていた可能性もある。また、南岳日記には貴重な情報をはなはだ多く埋もれてるということも改めて示してくれた。これは日記のみにとどまらず、他の諸データベースについても同様のことがいえるであろう。

## おわりに

本稿では泊園書院デジタルデータベース構築の現状を整理するとともに、その応用の具体例を二つほど示してみた。しめくりに当たって、筆者の経験と感想をいくらかつけ加えておき

13) 吾妻重二「藤澤南岳と宮武正策——高松の文人たち」（『関西大学中国文学会紀要』第42号、2021年）。のちこれを補訂して吾妻重二編著『南岳百年祭』記念論文集（関西大学出版部、2021年）に載せた。



たい。

筆者はかつて、南岳が明治42年（1909）12月に出席した「蘭亭帖会」について調べたことがある。<sup>14</sup> これは南岳のほか高谷桂堂、芝川又右衛門ら関西の著名な書画収集家が集まり、内藤湖南が詳しい解説を行なうという、京阪の文芸界にとってたいへん重要な集会であった。そもそも南岳は大正2年（1913）の京都蘭亭会の発起人に名を連ねており、そこから南岳と蘭亭会、王羲之の書との関係につき日記を調べたのだったが、大量の日記を1枚1枚めくって記事を探すのは容易なことではなかった。それでもパソコンに撮影画像データがあったからいいようなものの、もし冊子体の原本であったら図書館でいちいち閲覧手続をとり、特別閲覧室に何日も通い続けなくてはならないところであった。もしかするとそうした手間を恐れて調査を断念していたかもしれない。

ところが今なら「蘭亭」の語で複数ファイルを一括検索すればただちに用例が出てくるわけで、便利この上ない。<sup>15</sup> 本稿で紹介した多くのデジタルデータベースも、これを活用することで多くの発見がなされ、成果が生まれると期待されるのである。

ただし、いくつか問題点もある。現在、文字データはテキストファイルのままで句読点を施す必要があったりして、公開までにはまだ少なからぬ作業が残っているからである。データはあるが、それぞれがバラバラで使い勝手が良くないという状況もあり、これらを統合するシステムを作ることができればいいのだが、経費的にもマンパワー的にも容易なことではない。

このほか、データの作成と公開が研究者の業績とは認められにくいという問題もある。論文や単著は研究業績書に明記し評価されるが、WEBサイトコンテンツの構築や公開、充実は、少なくとも人文系においては論文や単著と同等の評価は得られないであろう。第三者が引用する場合も、論文や単著であれば執筆者名は必ず引用されるが、WEBサイトからの引用ではそうはならないであろう。このほか、出版書籍をWEB上ではただちに公開できないという事情もある。当たり前だが本が売れなくなるからである。

デジタルといっても、結局はアナログの地道な作業に支えられており、すべてをデジタルに置き換えることができないのも事実なのである。つまりはデジタルとアナログの「どちらか」ではなく、「どちらも」必要で、相互にタイアップしていくのがよいのであろう。

14) 前掲の『泊園文庫印譜集—泊園書院資料集成2』の「解説—藤澤南岳と印章」参照。これをいくらか補訂したのが吾妻重二「藤澤南岳と篆刻芸術・印譜」（藪田貫・陶徳民編著『泊園書院と大正蘭亭会百周年』所収、関西大学出版部、2015年）である。

15) ただし本稿で紹介した日記データでは蘭亭の「亭」の字がおおむね異体字の「亭」になっている。この二字は通用せず、「蘭亭」（正字）で検索しても「蘭亭」（異体字）はヒットしないようである。これは悩ましい問題で、正しい検索結果を得るためにはデータ上の漢字すべてを正字（もしくは常用漢字体）に直さなければならない。